

壮年期の娘をがんで亡くした父親の悲嘆過程

新潟医療福祉大学看護学科4年・柳谷由希子
新潟医療福祉大学看護学科・塚本康子、浅島宏美

【背景】

人の死は、一般的に先に生まれた人が先に亡くなる。そのため、逆縁の死別は苦痛が大きく、乗り越えられないライフイベントといわれており、医療者によるケアの必要性が高い。しかし、壮年期の我が子を亡くした親を対象とした研究は、悲嘆の内容を明らかにした研究がほとんどであり、特に、父親に特化した悲嘆過程やサポートに関する研究は見当たらなかった。老親は、子のターミナル期において、キーパーソンの役割をとることはほとんどなく、援助者の目にうつりにくい¹⁾とされている。親にとって我が子はいくつになっても我が子であり、患者の年齢に関わらず、療養中や看取り前後の親に対する支援が必要であると考えられる。これらのことから、壮年期の娘を亡くした父親の療養中から看取りまでの悲嘆過程を明らかにしたいと考えた。本研究では、その基礎として、手記を用いて壮年期の娘をがんで亡くした父親の悲嘆過程を明らかにすることを目的とする。

【方法】

研究デザイン：質的帰納的研究（手記分析）

研究対象：A 靄田伊三男、亡き娘に語る、文芸社ヒューマン選書、2001。B 深浦栄助、加奈子。何をしてやれたかな…、主婦と生活社、2009。

表1 対象者の概要

事例	対象者	患者背景				
		病名	享年	闘病期間	同居家族	続柄
A	80歳代	乳がん	34歳	8か月	夫、4人の子ども	長女
B	70歳代後半	S状結腸がん	49歳	5年半	父、母	二女

分析方法：本研究では、様々な背景を抱えている個人を対象として壮年期の娘の闘病生活や看取りについての悲嘆過程を明らかにする。そのため、複雑な要素が絡み合い混沌とした個別的な現象から一般的な秩序の発見をするための方法であるKJ法を用いることとする。佐伯らによる「癌の経過における家族の適応課題」を参考に、がんと診断されてから看取り後まで、①がんと診断されたとき、②治療をしているとき、③がんの再発・転移から亡くなるまで、①～③の経過に沿って分析した。

【結果】

①がんと診断されたときは、「診断に対する衝撃と否認」「一刻も早く治療」という2つの大カテゴリーが抽出された。②治療をしているときは、「何としても生きてほしいと祈る気持ち」「何としても助ける覚悟と家族としての見守り」「娘を救えない無力さと葛藤」「希望」「がんへの恐れ」「娘の強さ」という

6つの大カテゴリーが抽出された。そして、③がんの再発・転移から亡くなるまでは、「無念と絶望に悶える」「暗示と意味付け」「娘の人生に感嘆し、周囲に感謝」「希望」「娘の死への苦悩」「覚悟」「逃避」という7つの大カテゴリーが抽出された。

父親は、がんに対するショックや恐怖に悶え苦しむ一方で、現実を受け止めながらも希望を捨てずに何としてでも娘を助けると覚悟を決めていた。しかし、病状が悪化し、娘の死を意識することで、逃げ場のない苦しみを抱え、妻と手を互いに握り合っ、心を癒していた。また、病状が深刻な中で、自分らしく生きようとする娘のくじけない意志や力強さを見出し、娘の死後は、悶え苦しむ現実から逃避する中で、立ち上る線香の煙を見ながら、崇高になってしまった娘の姿に思いを致していた。

【考察】

E・キューブラー・ロス²⁾は、死の受容で各段階を通じて希望が存在するとしている。本研究においても、娘を救えない無力さを抱えている一方で、医学で治癒しなければ神に助けを求めると、娘の命が助かる道を探し、希望を持ち続けることで辛い娘の闘病生活を支える心の糧としていた。父親は、娘の希望を無条件で受け入れようと家族内の団結を強め、妻や我が子、娘の家族など、家族一丸となって娘の闘病生活を支えるための舵を取っていたように思われた。

娘の死後は、家族や娘の友人・知人と思い出話にふけりながら、娘が歩んできた人生を振り返り、意味づけを行うことで、娘の死を昇華していたと考える。

【結論】

壮年期の娘をがんで亡くした父親の悲嘆過程は、以下のようになった。

1. がんと診断されたときは、「診断に対する衝撃と否認」「一刻も早く治療」であった。
2. 治療をしているときは、「何としても生きてほしいと祈る気持ち」「何としても助ける覚悟と家族としての見守り」「娘を救えない無力さと葛藤」「希望」「がんへの恐れ」「娘の強さ」であった。
3. がんの再発・転移から亡くなるまでは、「無念と絶望に悶える」「暗示と意味付け」「娘の人生に感嘆し、周囲に感謝」「希望」「娘の死への苦悩」「覚悟」「逃避」であった。

【文献】

- 1) 柳原清子：老親が子を亡くすということ（逆縁）悲嘆と老いの弱りに焦点を当てて、家族看護1(2)30-34、2003
- 2) 佐伯俊成他：癌患者の家族に対する精神的ケア、コンセンサス癌治療7(1)20-23、へるす出版、2008
- 3) E・キューブラー・ロス著、鈴木晶訳：死ぬ瞬間—死とその過程について、読売新聞社、1998